喜劇

寶の拍手（二場）

曾我廼家五郎

桑名街道の茶店の場

桑名の舊家米相場師仙臺屋彌兵衛は家運傾き商賣の手違ひにて、今は浮沈の界とて必死の金策して最後のケントク取りに來る、通行の石工富藏は主家の再興の望みを抱いて江戸に働きに行かんとて來懸り未知の彌兵衛と出合ふ、彌兵衛富藏の言葉をケントクとして四十兩の賣買利金を見て富藏を無理に招待す。

仙臺屋の店先の場

番頭五兵衛は主人の手紙に富藏は大切の客人にて福の神とかいて有るので大事に招待する、主人不在中米一升と千石舟一杯の思ひ違ひで、富藏は問屋神崎屋より取引する、主人夫れ聞いて驚愕、富藏死を決する時、其相場一躍三百兩の利金、見て神崎屋より持參する一同喜涙安堵。

場所

伊勢桑名街道

仙臺屋の店先

人物

富藏　石工

甚兵衛　茶店

おとら　村女

十兵衛　船頭

五兵衛　番頭

吉三　手代

太兵衛　神崎屋

彌兵衛　仙臺屋

幸兵衛　旅商人

清七　旅商人

龜吉　仲仕

德松　仲仕

虎吉　走り

兵助　手代
大勢　若者

桑名街道

中央茶店有り、下手海岸遠見街道筋、村端茶店の體、賑かな囃子にて幕明く。

中央捨床几に仙臺屋彌兵衛無言物思の様子で莨のむ。

茶店甚兵衛茶釜の側にゐる。

上手より村女おとら出る。

おとら　甚兵衛さん御商賣物の茶を何日も貰えに來て濟まぬなア。

甚兵衛　何の同じ村の人間ぢや、野良仕事の中食に我家まで毎日茶取りに歸つてゐてはたまるかい、遠慮なしに毎日取りに來いよ。

おとら　大きに、皆も寄ると夫れを云ふのぢや、甚兵衛さんは正直で親切なそして物知りぢやと、誰でも云うてゐる、随分若い時は村の娘達が騒いだであろのと此間も話して居たのぢや。

甚兵衛　何ぬかすのぢやサア〳〵茶が這入た早う持つてゆきなされ。

おとら　大きに〳〵背戸の兩瓜（かぶら）が太つたら持つて來るぞ。

甚兵衛　夫れは有難い此方から今夜でも貰ひにゆくわ。
おとら　今夜來てもまだないぞ。
甚兵衛　何日(いっ)貰ひにゆくのぢや。
おとら　來年の二月頃になつたらぢや。
甚兵衛　今の事やないのか。
おとら　今頃まだ太いのがないわ、爺さん氣か早いな。
甚兵衛　違ひなしぢや。
二人　ハヽヽヽ。
仙臺屋　八釜しい。人が思案中に大聲出して笑ふなへ。
甚兵衛　おとらさんチトたしなみなされ。

（ト目で仕方、おとら呑込み去る。）

甚兵衛　旦那様女の笑聲は耳に立ちますなア。
仙臺屋　お前の聲の方が耳に立つがな。何お前方が笑うたとて俺が腹を立てる譯はないが、ツイムシヤクシヤしてゐると何んでも無い事でも疳が立つてなア、まア〳〵氣にしてくださるなや。
甚兵衛　イエどう致しまして心配事の有る人の前で高笑ひは出來ませぬ、然し心配事が有るとは、

矢張り御商賣の手違ひで御座りますか。

仙臺屋　お前達の耳に迄内の店の手違ひが聞えてゐるか。

甚兵衛　イエ何の老舗の有る桑名切つての仙臺屋さん、近郷近在鳴り響いた大相場師、よしや手違ひが御座りましても何の世間が知りますかいな、然し太腹と評判の旦那様が、朝早うからこんなむさい甚兵衛の茶店へお出でなさるさへ不思議で御座りますに、誰にお逢ひなさると云ふぢやなし、モ二タ時にも成りますのにヂツト思案なされて御座るお姿、常からお世話になつてゐる丈に一としほ心配で御座りますわいな。

仙臺屋　ヨウ親切に云うて呉れる、世間にまだ尻尾を見せぬのは先祖が殘した仙臺屋ののれんのお蔭ぢや、お前ぢやで云ひますが乘るか反るかの瀬戸際、思案の果てが此村端でケントクを取りに來てますのぢや。

甚兵衛　そんな物が私の店に御座りますかいな。

仙臺屋　此店に無い、此處は名にしおふ東海道ぢや、上り下りの旅人が、一日何人も通る街道浮世話の寄合場所と、問はず語りの人の言葉を聞いて、今日の相場は賣か買かと腹をきめて場所へ行かうと思うてゐるのぢや。

甚兵衛　成程大抵や御座りませんな、私で間に合ふ事なら何様な事でもしやべりますがな。

仙臺屋　親切は嬉しいがモ云うてからではケントクにならぬわい。

甚兵衛　此年になつて居乍ら何のお役にも立たぬ親爺、旦那さん私は一寸阿呆で御座りますな。

仙臺屋　今では私も其阿呆が羨ましい。
甚兵衛　ハクシヨン。
仙臺屋　イヤお前の事でないぞやハヽヽヽ。
甚兵衛　お旦那のお笑ひ顔を今日初めて見ましたがな、ドレ〳〵熱いお茶でも入れませう。

（茶汲に入る。船頭十兵衛下手より出る。）

十兵衛　甚兵衛さん今日は。
甚兵衛　オ之れから沖へ行くのかいな。
十兵衛　今日は少し沖へ出よと思ふがあの雲が悪いので、殊によつたら一雨下（さが）るかも知れんでな

―

仙臺屋　ウム下るか。
十兵衛　ア、吃驚した、仙臺屋の旦那ぢやないかい。
甚兵衛　どうぢや下ろかな。
十兵衛　下ると思ふが、西のあの雲がすいてゐるで上るかとも思ふのぢや。
仙臺屋　ヒエツ上るか。
十兵衛　ヘイ上る思ひますが甚兵衛さんお前どう思ふ。

甚兵衛　俺に聞く奴が有るかい、お前が船頭稼業で判らんかいシツカリせい阿呆奴。
十兵衛　偉いポン〳〵いふのぢやなア。
甚兵衛　云はいでかい老舗のついた大きな店を潰すか潰さぬかの瀬戸際ぢやわい。
十兵衛　大きな事を云ふなえ、一寸濱風が吹いたら此様（こな）な茶店はスグ潰れるわい。
甚兵衛　エイ縁起の悪い事をぬかすない。
仙臺屋　コレ〳〵甚兵衛年甲斐の無い何を云うてゐるのぢや、十兵衛早う沖へ出て働いて來い。
十兵衛　ヘイ〳〵相濟みませぬ今日は甚兵衛爺さんどうかしてゐますワイハ、、、、左様なら。

（ト上手へ入る。）

甚兵衛　何と旦那、人の氣も知らいであんな憎たれ口を吐（ぬか）しますのぢや、グワンとはり倒してやろかと思ひましたがな。
仙臺屋　イヤ其の御親切は有難いが先は何も知らぬのぢや、夫れにお前が喧嘩腰になつて呉れては私がケントクも何も取れぬでな偉い勝手ぢやが、之れからも此處に休む人が有つても必ずお前は物を言はぬ様、さすれば私に物いふにきまつてゐる、其の言葉をケトンクに取つて見るでな、どうぞだまつてゐておくれ。
甚兵衛　成程々々之れから決して物は云ひませぬ、誰が何を云ひ掛けても滅多に此舌を動かす事

ぢや御座いませぬ。

仙臺屋　無理な事許りたのんで済まぬなう。

（無言手眞似で返事する。）

仙臺屋　氣の毒に丸で啞ぢやがな。

（之れにて旅商人清七上手より出る、床几の端に腰おろす。）

清七　茶店の一寸休まして貰ひます。お茶一つ下され、コレ親爺どの、ア、此の親爺さんはつんぼぢやなア。

（之れにて旅商人幸兵衛下手より出る、床几の端にかける。）

幸兵衛　ヤレ〳〵くたびれた〳〵。オ御油の宿で合ひました小間物やさんですなア。

清七　オー之れは〳〵又お目に懸りましたな。

幸兵衛　お互に東海道を股にかけてゐますと、逢ひかけたら宿々で幾度會ふか判りませんな。

清七　眞實ですな、旅から旅を巡る身は行先は我家で、女郎が嬶ですわい。

（幸兵衛莨の火をさがす、中央の仙臺屋莨盆を出さんとする時清七は火繩の火をさし出すので、幸兵衛夫れで莨の火をつける。）

幸兵衛　あほらしい、女にもてる顔やおまへんでな。

清七　でも顔や形に迷はぬけれど、主の實意にや泣かされる。

幸兵衛　コリヤ〳〵。

仙臺屋　（だしぬけに）八釜しいわい。

清七　吃驚した、何ぢや此人は。

仙臺屋　たいがいにしておけ。

幸兵衛　何をたいがいにするのぢや、わしの口でわしが唄ふのに誰に氣兼が有るのぢや、代官様の様な大きな面をさらして、八釜しいとわ何ぢやい。

仙臺屋　云うて惡けりやあやまりもするが、大事な思案をしてゐる俺の前で大きな聲で宿場女郎の惚氣話、揚句の果てが調子はづれのドラ聲上げて、歌を唄ふとは浮世になれた商人衆に似合はぬ。

清七　似合ふが似あふまいが大きなお世話ぢや、女郎の惚氣がどうしたのやお前に錢出して買う

て貰ふぢやなし。

仙臺屋　何でわしがお前方に女郎をあてがふ義理が有るのぢや。

幸兵衛　なけりや文句ぬかすなえ。

仙臺屋　別に文句を云はぬなれど、旅は道づれ世は情かうして私が二人の眞中に腰をおろしてゐるのぢや、何も私を飛ばして二人で話をせいでも一寸位私にもの云うて吳れてもよいぢやないか。

清七　ハーンすると俺達の惚氣をききたいといふのか、聞かしてほしくば聞かしてやるわ、俺と彼奴の馴染はな。

仙臺屋　エイ五月蠅わいグヅ〳〵ぬかすと、若い者よびにやつて此宿からほり出すぞ。

清七　オ甲斐性有れば放り出して見い、流れ渡りの旅商人ぢや、そんな毛〆におどされて震へ上つて稼業が出來るかい、度胸があればやつて見い。

幸兵衛　コレ〳〵申し、やめなされ〳〵。

清七　夫れでも餘り云ひ草が過ぎますがな。

幸兵衛　サア夫れが所でなかぬ犬はないの、諺の通り殊に相手が惡いがな〳〵あの目附見なされ目がすわつてますがな、只の人と違ひますがな。

清七　只の人間と違ふとは彼奴何ですやろ。

幸兵衛　判つてますがな、小金持つた商人と見れば知らぬ人間に云ひ懸りを見せてレコにしよと

の魂膽ですがな、東海道にはあんなのはチヨイ〳〵御座りますわいな、つまり金儲けにしよとな。

仙臺屋　さうぢや金儲けぢや金儲けにかゝつて居たら、どうしたのぢや。

幸兵衛　夫れ見なされ蛙は口から、若い奴と云ひましたのはつまり手下ですがな。

清七　成程さういひなさると血走つたあの目附、眞青のある顔色怖ヤ〳〵、君子危きに近よらずぢや又御目にかゝります。

幸兵衛　どうぞ御きげんよろしく。

（ト兩人荷を手早くかつぎ乍ら、挨拶して上下へ別れ入る。）

仙臺屋　甚兵衛さん聞いたかい、何と腹の立つ奴等ぢやないか、わしをゴマの蠅か何ぞの様に人相が悪いの何のとぬかすのぢや。

甚兵衛　又人相が悪う御座りますがな。

仙臺屋　ナニツ。

甚兵衛　此様に申上ては失禮で御座りますが、御心配が有るせゐかお顔の色は悪るし人に物を云うて貰ひたげにジロジロ御覧になる、私でも其のお顔の色を見ましたら濟まぬと思うても物が云へません、不見不知の者なら尚の事ゴマの蠅とまちがひもしますわいな。

仙臺屋　ア、羨しい、思ひ内に有れば色外に表はれる、わしはそんな氣ぢやないが生死の境に迷うてゐる仙臺屋ぢや、モ地獄の門口まで行つてゐる私、鬼の様な顔に見えるであろ、之れではよいケントクも取れぬわい。

甚兵衛　サアそこで御座り升、浮世話は世辭愛嬌と申しまして此處へ休んだ客人にニコ〳〵笑うて世間話でもしかけて御覧なさいませ、偉い馴れた方ぢやと嬉し相に物も云ひます、其の内によいケントクをお取りなされませ。

仙臺屋　成程おうた子に教へられぢや、カウこはい顔をしてゐては誰もものの云ひ手も有るまい、ヨシ人が來たら笑ひませう〳〵ニコ〳〵と嬉しさうになア。

甚兵衛　オ其のかほ〳〵かはいらしい、おかほで御座りますな。

仙臺屋　甚兵衛なぶつてくれなえ。

二人　ハハヽヽヽ。

（トこれにて花道より石工富藏旅装にて石やの玄能を手拭に包み出で來る。）

（物尋ねんと思へど仙臺屋のニヤ〳〵笑ふので氣味惡氣に上手へ行きかける。）

甚兵衛　コレ〳〵旅の人お休みなされ、お茶一つ上つて行きなされ。

富藏　誠にすまぬが水一杯頂かして下さるまいか。

甚兵衛　水と云はず茶のんで行つたらどうぢや。
富藏　茶のんだら茶代取るやろ、其の茶代が拂へる位なら初めから水くれと頼まぬが、旅しながら僅かの路金で江戸へゆきますもの、水で結構でございますで一杯恵んで下され。
甚兵衛　ア氣の毒な錢無しで江戸へ行くのかいな。
富藏　ヘイ野宿し乍ら參りますので。
甚兵衛　それは〳〵わしも若い時分に覺えがある、よしよし錢も何も入らぬあの床几に腰かけて熱い茶を一杯のんで行きなされ。
富藏　ハイ〳〵夫れではお客が見えたらスグのきますだ、暫く休まして貰ひます。
甚兵衛　サア〳〵

（富藏腰かける。）

甚兵衛　サア〳〵お茶ぢや。
富藏　御馳走様で御座います、まだ江戸まで餘程御座りますかいな。
甚兵衛　何いふのぢや、此所はまだ伊勢ぢや、こんな所で江戸きいて判るかいな。
富藏　左様で御座りますか、夫れでは暫く休まして貰ひます。（ト仙臺屋の笑ふのに氣味悪く）モシアンタ此家のお方かいな。

仙臺屋　ヤー占めた、物云うて呉れた何ぢや〳〵。
富藏　吃驚した云うて惡かつたのかいな。
仙臺屋　何の惡い事はない、先刻から物云うてくれるのを待つてゐた、サア云うてくれ〳〵。
富藏　別に六ヶ敷い事ぢやないのぢやが、實は江戸へ行きますのぢや。
仙臺屋　一寸まつた私の氣の靜まるまで一寸待つてくれ、待てよ〳〵一ぷくしてからぢや。サアよし云うてくれ。
富藏　此の人氣は慥かいな。私は江戸へ行きますのぢや、東海道から行からか中仙道から行こかと迷うてますのぢや。
仙臺屋　待つた氣が迷うてゐる。わしも氣が迷うてゐる、よしツサア次ぎ。
富藏　變な人ぢやな、私の云ふ事判つてるのかいな、わしは此處の者ぢやない泉州堺の人間ぢや。
仙臺屋　ナニ堺。ウム賣るか買ふかの堺か、よし次ぎ。
富藏　此人私の言葉判つてるのかいな。わしは石屋の職人ぢや。
仙臺屋　待つた。ナニ石屋か　難い此のケントクは慥かに固い、次ぎ。
富藏　石屋の職人で富藏といふのぢや。
仙臺屋　名は富造といふのか。
富藏　イヤ富ロウといふのぢや。
仙臺屋　富ロウ、妙な名ぢやな。

富藏　富といふ字と藏といふぢや。
仙臺屋　ウム〳〵富藏か。
富藏　イヤ富ロウ。
仙臺屋　富造。
富臓　お前さん一寸舌が廻らんなア。
仙臺屋　お前が廻らぬのぢやがな、富藏とは藏か富むフーム縁起がよいな、次ぎ。
富藏　一時も早う江戸へいて一番頭を上げよと思うて。
仙臺屋　ナニ頭を上げる。
富藏　頭を上げねば故郷の堺へ歸れぬからぢや。
仙臺屋　キツト上げるか。
富藏　必ず上げる。

（ト此時走り虎吉來る。）

虎吉　オ仙臺屋の旦那樣これにおゐでゝ御座りますか、只今場が立ちますが今日はお越しになりませぬか、如何なされます。
仙臺屋　オ場が立つか、よしッ、サア此の財布のまゝ小判で二百兩お前に渡す故これで買ひぢや

買うてくれ。

虎吉　ヘイ買ひで御座りますか。

仙臺屋　さうぢや早よ行け。

虎吉　ヘイ買つた〳〵〳〵。

（ト勢よく虎吉走り入る。）

仙臺屋　ヒヤー有難い〳〵、コレお前さんのおかげで氣が決まつた　買うた〳〵。

富藏　コレお前さん何を云うてゐるのぢや、私の返事はどうぢやいな。

仙臺屋　オ何やら云うてゐたな。

富藏　便りない人ぢやな、江戸へ行きますのに東海道が近いか中仙道か得か、夫れをきいてますのぢや。

仙臺屋　オさう〳〵何ぢやそんな事いうてゐた様な氣がする。夫れは中仙道は廻りみち東海道は本街道ぢや。

富藏　ヤハリ箱根を越えてなア。

仙臺屋　さうぢや〳〵。

富藏　大きに〳〵夫れきいてますのぢや、お前さん何をきいてたのぢや。

仙臺屋　わしはケントクを見てゐたのぢや。
富臓　ケントクとは何ぢや。
仙臺屋　まア早くいへば辻占ぢや。
富藏　お前さんは八卦見か。
仙臺屋　イヤわしは米屋ぢや。
富藏　米屋か。
仙臺屋　相場師ぢや。
富藏　相場師とは何ぢや。
仙臺屋　まア〳〵米屋ぢや。
富藏　その米屋が私の云ふ事きいて商ひしてゐるのか、お前は此の頃餘ほど貧乏してゐるな。
仙臺屋　そんな事が判るか。
富藏　判る譯ではないが不見不知の人の云事を便りにして商ひしてゐる樣では氣が迷うてゐるワイ、貧乏すりやこそ氣が迷ふのぢや、商ひに迷うたらあかんぞ、迷はず働け働け、かはい相に顏色も惡いチト甘いものでも食へよ。
仙臺屋　イヤ大きに星さゝれて面目ない、さう云うてくれるで話をするが私は此の桑名の宿で相當人に知られた商人ぢやが、二三年此の方手が合はずにする事なす事イスカのはし程食ひ違ひモ此頃はつまる丈けつまり果て、家藏を質に入れてこしらへた金、お寺開くか緋衣きるか地獄

の上の一足飛びと度胸はきめても氣が迷ひ、賣るか買ふかの六道の辻を迷つてゐる亡者同様、お前さんのケントクを取つてヤツト心も決まり今商ひさしましたのぢや、然し私も苦しい手元ぢや、先刻チラト耳に這入つたが、お前さんも野宿してから江戸行くとは餘程手元が苦しいな。

富藏　私はお話にならんワイ。

仙臺屋　オさうで有らう〳〵一體お前さんは、どんな身の上ぢや。

富藏　見ず知らずのお前さんに身の上話す譯もなし、又お前さんも聞いたとて面白い話でもないでな。

仙臺屋　何の面白い話と思ふかい、初めて逢うた人の身の上話をきくといふ譯はないけど、變な破目から我の身の上もお前にきかしたのぢやないか、袖すり合ふも他生の縁、話をきいて見た上で、わし等で役に立つ事なら相談にも乘らうぢやないか。

富藏　わり方親切な方ぢやな。

仙臺屋　わり方といふ事があるかい。

富藏　ハ、、、私は此の泉州堺の南の方に石るといふ里がある。

仙臺屋　石るハテ私も商用で泉州大和の方へ行く事が有るが、石るといふと。

富藏　それ晒木綿の出來る處ぢや。

仙臺屋　ハ、、、それなら石津ぢや。

富藏　石る。

仙臺屋　石津ぢや。
富藏　俺は處の者ぢや、間違はぬ。そこに和泉屋といふ石ロイヤが有る。
仙臺屋　ハテナ石ロイヤとは。
富藏　判らぬかいな、石の燈籠や手洗鉢をこしらへるイシロイヤぢや。
仙臺屋　それなれば石問屋ぢや。
富藏　可哀想にお前一寸舌が廻らんなア。
仙臺屋　お前の方が廻らぬのぢやがな。
富藏　俺は其家に九歳から奉公して今年三十六ぢや、一人前の職人に仕上げてもろたのは皆其家のお蔭、その内一昨年親ランナ様が死んだので若ランナが一切。
仙臺屋　まてワカランナとは何ぢや。
富藏　此邊で云はぬかいな泉州では親ランナの伜を若ランナといふわい。
仙臺屋　夫れなれば若旦那。
富藏　お前一寸分らんな。
仙臺屋　お前の方が判らんのぢやがな。
富藏　夫れから先といふものは、何ぼか有つた身代は皆若旦那の自由になるわ、堺の土地に龍神といふ廓が有る、何日の程に通ひつめたやら去年の盆までに皆使ひ果した、俺が知つてゐたら意見もするなれど、俺は一寸も知らぬ悲しさ、ナゼか若旦那は毎晩おかへりにならぬが、不思

議なと思ふ内たうとう去年の盆に先祖代々傳つた家藏まで八十兩の抵當に入れた、さうなると店の番頭は大金持つて逃げて仕舞ふ、澤山有つた奉公人も一人へり二人へりあげ句の果が若旦那は女にだまされ、其上わづらうてなア、たうとう去年のくれに大晦日の日限がきて、其家は人手に渡さねばならず、若旦那の仰有るのは富藏やとんでもない心得違からこんなになつた。お前は手に職が有る故どこなりと行き働いてくれ、俺は竹杖ついて四國八十八ヶ所をまゐつてくると仰るのぢや、考へて見てくれ九ッや十からお世話になつて、どうぞかうぞ一人前の職人に仕上げて貰うて、其の御主人がさうなつたとて左樣で御座いますかと、わしが人間なら別れられるかい、兎も角私の在所へおいでなされませと、三里離れた百舌鳥村といふ俺の田舍へお供して内の伯父なア。

仙臺屋　俺は知らぬがな。

富藏　お前さんは知らぬが伯父貴が有るのぢや、其の伯父貴に賴んで、若旦那をあづけて、俺は毎日仕事して一緒にくらしてゐたのぢやが、めし食ふ時になると若旦那がすまぬ〳〵と仰有つて、澤山奉公人の有つたになぜお前にかうおせわになるので有らうと、奉公人のわしに手をついて禮を仰有る、俺はたまらぬ、御主人が奉公人に禮をいふ事が御座りますかいな、當前で御座りますがな（と、泣く）若旦那の仰有るに金は仕方がない、只殘念なのは先祖代々傳つた家藏を入手に渡したのは、死んでも御先祖に顔が合はせぬと明けてもくれても泣きくらし、俺も何とかして取戻したいと思ふなれど、八十兩もの大金田舍でどうして儲かるものか、俺の村の

お庄屋様の仰有るに、江戸は將軍様のお膝元だけ、土一升に金一升一番江戸へ出て働いたらモシヤ儲からぬ事は有るまいと、夫れきいてから矢もたてもたまらず、嫌がる若旦那に因果をふくめて、二年の間暇もろて若旦那を伯父貴にあづけ、先月十六目一貫八百の路金をもつて來たのぢやが、俺の立つ時は若旦那が病氣の身を村はづれの地藏堂なア。

仙臺屋　俺は知らんがな。

富藏　サアお前は知るまいが、其地藏堂迄送つて來てモここでお別れ申ますと云ふと、若旦那は其街道筋へベツタリ坐つて、お前歸つて來るまでは死んでも死ねぬ、キツト待つてゐると仰有つて、泣きなされたお姿、まだ目の前に見える、一日も早う江戸へゆき若旦那を救ふのぢや。

仙臺屋　エ救ふか、相場師に緣起がよい必ず救ふか〳〵。

富藏　必ず救ふ。

仙臺屋　偉い。コレ甚兵衞救ふとい〳〵。

（ト此時以前の虎吉走り出る。）

虎吉　オ旦那様只今御注文の通り買ひましたら、見る〳〵内に上を見て、二丁上りで四十兩のおまうけ、後場はどうなされます。

仙臺屋　ナニ。二丁上り。有難い後場は賣つて〳〵。

虎吉　賣りで御座りますか。賣つた〳〵。

（ト引返す。）

仙臺屋　コレ聞いたか、甚兵衞ケントクが圖に當つて二丁上りで四十兩儲けた。

甚兵衞　御目出度御座います。

仙臺屋　イヤ皆此人のお蔭ぢやアンタ有難う御座います。

富藏　お前さん私に何の禮をいうてゐるのぢや。

仙臺屋　サアお前さんのおかげで今四十兩まうけさせて貰ひましたのぢや。

富藏　俺はそんな事知らぬ。

仙臺屋　イエお前さんのケントクでなア。

富藏　夫れは俺は知らぬ、覺えのない事を禮いはれて心もちが惡いでな。

仙臺屋　感心々々。オイ甚兵衞さんきいたか、僅かの事でも恩にきせる人が多い世の中に、俺は知らぬ〳〵と云ひ切つて、割竹破つた樣なお胸の内恐入つた、此人には頭が上らぬなア。

甚兵衞　世に珍らしい人で御座いますなア。

仙臺屋　惚れたな。男ぢやな。禮いうて氣に入らねば申しますまい、わたしの胸の内で兩手合してをります。

富藏　夫れはお前さんの勝手ぢや。
仙臺屋　ハイ〳〵。したがお前大望持つた身で野宿許りでは身體もたまらぬ、どうぢや今晩一晩わしの家へ來て泊つてゆきなされ、甘味（うまい）ものもくはさねどせめて茶づけでも、あたゝかい蒲團で手足休めてゆきなされ。
富藏　ハイ御親切は嬉しいが、今初めて此所で逢うて、どこの牛の骨やら馬の骨やら判らぬお前。
仙臺屋　これ〳〵夫れは何をいふのぢや、それは此方がいふのぢやがな。
富藏　ハヽヽ蟲にさはつたら勘忍しておくれ、成程お前さんの目からわしを見ればどこの牛の骨やら判らんが、わしからお前さん見ればどこの……御親切は嬉しいが、何のかゝり合もない人に厄介になるのも心苦しいで、お志だけ頂きます、わしは氣がねするのがイヤでなア。
仙臺屋　氣がね等させぬわい。
富藏　此方がするのぢや、氣兼といふのはお前からさすものぢやない、勝手にするのぢや、お前の親切は判つてゐるが、お前も女房が有るであろ。
仙臺屋　わしは女房はない。
富藏　その年まで女房がなけりや身がもてぬわい。
仙臺屋　イヤ去年死んだ。
富藏　まアお力落しぢや、お前一人でくらしてゐるのか？
仙臺屋　イヤ一人ぢやない奉公人が有る。

富藏　其の奉公人がゐかん、お前の親切は奉公人にないキツト厄介者がきたの居候が來たのと蔭で云ふ。

仙臺屋　そんな事云はさぬ。

富藏　蔭で云ふのぢや。そんな事でも云はれて見よ俺の氣ぢやものツイ文句の一ツも云ふ、此の儘別れておけば氣持よう別れられるに、一晩厄介になつたので氣まづい別れやうせねばならん事になるとも知れぬ、御親切は嬉しいが此の儘別れて緣が有れば歸りによる、まア達者でくらせ。

仙臺屋　甚兵衞さん恐入るな。

甚兵衞　感心な男で御座いますな。

仙臺屋　カウなると尙一晩の宿がしたいな、コレわしは決して居候とも厄介者とも思はぬのぢや、お前さんのおかげで儲けさして貰うたわしの恩人としてお宿申し上げたい、大事の〳〵お客樣ぢやお前さんに逢うたおかげで浮世の明るみへ出られた氣がする、永らく福の神に見放されてゐた仙臺や、お前さんといふ福の神に助けられた氣もするのぢや、夫れを此まゝ別れては折角の福の神が逃げてゆかれる樣な氣もする、どうぞ聞入れて泊つてくれわしの方から賴みます〳〵。

富藏　面白い人やな。わしも一晩暖い布團の中で寢ても見たし米の飯もたべたいが、氣がねするのがつらさになア。

仙臺屋　その氣兼はささぬといふのぢや。
富藏　キツトさゝぬか。
仙臺屋　ヱライだめの押様ぢやな、お客様に氣がねさしては私がすまぬわい。
富藏　ア有難いおせわになつた御恩はきるが、居候でも厄介ものでない頼まれてゆくのぢやでお客様ぢやな。
仙臺屋　さうぢや〳〵。
富藏　恩にきてもベンチヤラは云はぬぞ。
仙臺屋　そんな事はいらぬ。
富藏　その替りお前も俺にベンチヤラは入らぬ、お前も俺に氣兼せいでもよい。
仙臺屋　わしが氣がねするかい。
富藏　さう〳〵俺はお前に旦那といはぬ。
仙臺屋　さう共。
富藏　お前も俺に旦那様といふなよ。
仙臺屋　わしがいふものか。
富藏　どつちも氣がねなしに富藏々々とよんでくれ、わしもお前よぶ時は、お前名は何といふのぢや。
仙臺屋　わしは彌兵衛と云ふのぢや。

富藏　八重さん女の名の様ぢやな。
仙臺屋　八重ぢやない彌兵衞といふのぢや。
富彌　彌兵衞か夫れでは彌兵衞とよぶ、お前も富藏とよべよどつちも氣がねなしに。それでは早ういて飯よばれよか。
仙臺屋　偉い氣が早いな。甚兵衞ヤツト御得心して頂いて今晩はお越し下さる。時にわしは一緒にゆきたいが今聞く通りこれから會所へ金を上げにゆかねばならぬ、お前一足先にいてくれまいか。
富藏　わし一人かい。
仙臺屋　わしは後へすぐ歸るでな。
富藏　夫れは彌兵衞都合が惡い、顔も知らぬものが一人ではなア――。
仙臺屋　よし〳〵夫れでは店の者はわしの手を知つてゐるで一筆手紙かかう。
富臓　そしてくれ〳〵、然しお前早よ歸つてくれよ、斯うなれば矢張り彌兵衞一人たよりぢやでな。
仙臺屋　これさう彌兵衞々々々と丁稚見たよに云うてくれるな。

（ト矢立出す。）

富藏　コレ夫れ奉公人に渡す手紙ならどないかいてもよいのやな。
仙楽屋　よい共〳〵。
富藏　同じ事なら俺の云ふ通りかいてくれ、其の手紙一本で先のあつかひが違ふでな。
仙臺屋　ナカ〳〵ぬからぬなサア何んでも書かう。
富藏　まづ初めは申附ける一札の事とかけよ。
仙臺屋　丸で奉行所の呼出しぢやがな。よしそれから。
富藏　それから一此のお客様は。
仙臺屋　お客様とは。
富藏　わしぢや。
仙臺屋　成程々々。
富藏　コレ忘れてはどもならんなわしはお客様ぢやでな。
仙臺屋　さうぢや〳〵。ツイうつかりとお客様を忘れてゐた濟まぬ〳〵夫れから。
富藏　大りの〳〵。
仙臺屋　大りとは何ぢや。
富藏　此邊で云はぬかいな大切といふ事ぢや。
仙臺屋　ハー大事の〳〵。
富藏　大りの〳〵。

仙臺屋　大りの〳〵。
富藏　可哀想に餘ほど舌がまはらぬなア。
仙臺屋　お前がまはらぬのぢやがな、夫れから。
富藏　家の福の神に御座候。
仙臺屋　ハヽ、福の神とは、面白いなヨシ〳〵それから。
富藏　たべものは。
仙臺屋　食べ物の事など云はいでもよいやないか。
富城　同じ禮を云ふなら甘味い物喰べたいでな。
仙臺屋　仲々拔け目ないがな、それから。
富藏　榮耀な御方故酒肴……。まアよいわ、萬りは御相談下され度候でよいわ。
仙臺屋　萬りとはなんぢや。
富藏　何もかもと云ふ事ぢや。
仙臺屋　それならバンジぢや。
富藏　お前さんそんな事云うたら人に笑はれるぞ。
仙臺屋　お前が笑はれるのぢやがな。宛名は番頭五兵衞でよいな。
富藏　それはなんぢや。
仙臺屋　これは内の番頭ぢや、此男を尋ねて行つて呉れたら直ぐ私は後で歸るでな。

富藏　よし〳〵腹が空いてゐる故に歸らぬ先に此五兵衞と云ふ男に賴んで飯喰はして貰うてよいか。

仙臺屋　よい共〳〵五兵衞に云ひ付けて何なりとよい物食べて吳れ。

富藏　マア五兵衞に逢うて見る、これが氣持樣云うて吳れたら私が氣ぢやモシモ此男が變な男であつたら直ぐ立つて仕舞ふぞ、殊によると此まゝお前に逢へぬも知れぬ。

仙臺屋　まアさう云はずにな、そんな男ぢやないでな。

富藏　行つて見ねば判らん、緣の者ぢやで。

仙臺屋　ハイ〳〵左樣で御ざいます〳〵。

富藏　それでは先に行きますぞや、オヽ忘れてゐた、お前の家は何處ぢや。

仙臺屋　アヽこれはうつかりしてゐた、今來た道を引返してあの松原を拔けると桑名の町、街道の中程で山形に仙の字の店のれん、仙臺屋と聞けば直ぐ判りますぢや。

富藏　さうか殘念な事をした。

仙臺屋　どうした。

富藏　モツト向うで逢へばよかつた後戻りぢや。モシ亭主御聞きの通り妙な緣で今晩一晩彌兵衞方で厄介になりますで、又明日早う此街道を通りますでお禮を云ひます、二文の茶代でも置きたいが天にも地にも二十四文よりないでな彌兵衞に貰うておいてくれ。

仙臺屋　よい〳〵私がおいて行く〳〵。

富藏　それでは早う歸つて呉れよ。

（ト石工道具を忘れ行きかける。）

（仙臺屋それを見て取り上げ。）

仙臺屋　コレ〳〵忘れてる物がある〳〵。

富藏　オヽ大事な物を忘れてゐた、それは私の身代ぢや。

仙臺屋　ホウ大分重いな。

富藏　重い筈ぢや中は金ぢや。

仙臺屋　何、金とは。（ト驚く）

富藏　金は金ぢやが石やの玄能。

（ト包を解く中から玄能とのみ現れる此ト端。）

（木の頭）

仙臺屋　アツ玄能のよい事を云ふ男ぢやハヽヽヽ。

（ト此模様よろしく。）

（道具一轉）

第二　桑名宿仙臺屋店先の場本舞臺正面三間の二重家臺上手土藏の入口を見せ下手は臺所へ通じる出入り、その下手格子の表構に紺のれん、山形に仙の字染め抜いてかけある、穀物問屋仙臺屋の店先の模様よろしく、道具、納る。

正面二重の上にて番頭五兵衞帳面を調べゐる、帳場には手代吉三帳付なしてゐる。

吉三　水上げやぞ。

徳松　オーイ。

（仲仕徳松亀吉兩人は揚幕より上手倉の中へ俵を運んでゐる、此時花道より富藏出來り七三にて亀吉は徳松と間違へ米俵を富藏の肩の上にのせる、富藏は不意の事とて倒れる。）

亀吉　ヤイ阿呆め何をこんな處にぼんやり立つてゐるのぢやい、仲仕と間違へるわいボンヤリめ何を面をふくらしてけつかるのぢやい、早くのかんかい往來の邪魔になるわいのけ〳〵。

富藏　ヤイうぬは何處の奴ぢや、往來に立つてゐる俺の頭の上からこんな物をがンとのせて、倒

れて痛い目をしてゐるのに貴様の方から文句ぬかす、そんな譯の判らぬ話があるかい。

龜吉　うぬがそんな處にボンヤリ立つてけつかる故間違へるわい。

富藏　伊勢の桑名街道に人が立つてならぬのかい、これはお前の街道かい天下の往來ぢやろ邪魔になれば初めにのけと云へばのきもするわい、旅の者ぢやと思うて馬鹿にするない、話が判らにや代官か奉行様へ行つて白砂をつかんで話を仕様か、うぬはジクツの判らぬ奴ぢやなあやまれ。

龜吉　文句の多い奴ぢやな、あやまりやよいぢやないか、かんにんしてや。

富藏　旅の者は心細う歩いてゐるわい、あんまり大きな面をするな。

龜吉　ヘイ〳〵あんたはん一寸御免なはれや。

（ト倉の中へ俵を選ぶ。）

徳松　お前もさうぢやないかい、後から來るのが判らんか。

富藏　判らぬ、俺は頭の後に目はないわい、マア〳〵すんだらよいわ、一寸たづねるが仙臺屋と云ふのは此處か。

徳松　仙臺屋は此處ぢや。

富藏　お前は。

徳松　おれは仲仕ぢや。
富藏　名前は。
徳松　徳松ぢや。
富藏　そつちのは。
龜吉　おれは龜吉と云ふのぢや。
富藏　どつちも違ふな、お前の内に五兵衞と云ふ男は居らぬか。
龜吉　それは内の御番頭さんぢや。
富藏　オヽそれぢや一寸五兵衞を呼んで呉れ。
龜吉　五兵衞なんて呼んだら叱られるわい。
富藏　大事ない者ぢや、五兵衞をよべよ。
龜吉　五兵衞なんて云へぬわい。

（と大聲に云ふ。）

五兵衞　へエ――。

（五兵衞返事し乍ら表へ出て。）

五兵衞　誰ぢや、俺を呼んだのは。
富藏　私ぢや。
五兵衞　なんぢやい横柄に五兵衞なんてぬかすなへ。
富藏　お前五兵衞ぢやないのかい。
五兵衞　五兵衞ぢやわい。
富藏　それではよいぢやないか、五兵衞に六兵衞と云へば可笑しいが五兵衞なら當り前ぢやなア
　五兵衞。
五兵衞　煩い奴ぢや何の用ぢや。
富藏　今の先向うの立場茶屋でお前とこの彌兵衞に逢うたのぢや。
五兵衞　コラツお前とこの彌兵衞なんて失禮な事、吐したら、田舍者の貴樣なんか知るまいが、
　此桑名の宿で家の旦那を彌兵衞なんて呼び捨てにさらしたらお前の口がゆがむぞ。
富藏　どつちへゆがむのぢや。
五兵衞　そんな事判るかい。
富藏　彌兵衞と呼ばねば何と呼ぶのぢや。
五兵衞　旦那樣とか仙臺や樣とか吐かせ。
富藏　そんな事云ふ位なら初めからやつて來ぬわ。

五兵衞　來ず共よいわ、見れば薄きたない身なりで大抵無心者であらう歸れ〳〵。
富藏　ア矢張り私の目は高かつた、それでは歸らう彌兵衞が歸ればさう云うておくれ、富藏と云ふ者が來たなれどかう云うたら歸つたと、緣がなかつたなアと俺が云うてたと、出世の出來ぬ面四ツ、竝べて彌兵衞に叱られるわ。

（ト行きかける。）

五兵衞　コレ待てお前は逢うて行けと云はれて來たのかい
富藏　賴まれて來てやつたのぢや、お前方は私の身なりがきたない故、無心者と思ふであらうが俺は大切なお客樣ぢや、江戸へ大金を儲けに行く、こんな處に用は無いが彌兵衞がどうぞ來て下されと賴んだ故やつて來たお客樣ぢや。
五兵衞　それならそれとなぜ初めから云うて來ぬのぢや。
富藏　それを云ふ間のない内にお前の方から歸れ〳〵と吐したのぢや、マアこんな處で大聲上げてゐても近所へ聞えが惡いマアこつちへ這入れ〳〵。

（ト先へ入る三人も後より入る。）

富藏　商人の店先でガア〳〵大聲上げるとのれんに疵がつくお前五兵衞ぢやな。
五兵衞　さうぢや。
富藏　それではこれを見てくれその上で今の様な調子で有つたら直ぐ出立するでな。
龜吉　番頭はん大方此野郎街道で空腹かゝへてゐたのを家の旦那のお情で拾はれて來たのですわい。
富藏　誰が拾はれたのぢやい矢張り歸るわ。
五兵衞　まア〳〵待つて〳〵龜吉お前も默つて居れ。

（ト手紙を讀む。）

富藏　早う讀めよ。
五兵衞　さう云うたらウロ〳〵するがな。ナニ〳〵これは旦那の手ぢや。
富藏　彌兵衞の手ぢやろ。
五兵衞　フム一ツ此のお客様は大事の〳〵御客様に御座候家の福の神に御座候、ハテナ福の神。

（ト富藏を見る、富藏鼻を押へる。）

五兵衞　喰物は榮耀な御方故萬事は御相談被下度候、仙臺屋彌兵衞、番頭五兵衞殿――。これお前方は何と云ふ失禮な事を申し上げるのぢや、一寸身なりがきたないと直ぐ口がゆがむなんて吐しやがつて。

龜吉　それはあんたが云うたのですがな。

五兵衞　左様か。へ、――誠に存じません事で失禮申し上げまして何共申譯も有りませぬ、今の手紙でチヤンと判りました、イヤモウお恥しい田舍者と云ふ者は目先が見えませんでへ……。

富藏　俺も田舍者ぢやでな、お前方も餘りぢや、あの龜と云ふ男なぞはポン〳〵吐してな。

五兵衞　何共申譯も御ざいませんサア〳〵どうぞ御すゝぎを取らんかい。

二人　へイ……。

（ト水を持つて來て富藏の足を洗ふ。）

富藏　その様にされては痛み入る、さう大切にして貰ふ程の客ぢやない。

德松　イエどう致しまして結構なお御足で。

五兵衞　阿呆奴馬ぢやあるまいし足をほめる奴があるかいへ……。

富藏　彌兵衞が一所に歸れば判るのぢやが、あれは會所とやらん行つて後で歸る故歸れば委細聞いてくれ。

五兵衞　イヤモウチヤンと判つて御ざります、初めから私が出ましたらこんな粗忽もなかつたのですが。

富藏　初めからお前が出たのぢやがな。

五兵衞　アツ左様か誠に早やへ……。

富藏　此のわらぢはまだ新しいであす又入用ぢやでな。

徳松　ヘイ〳〵チヤンと私が日に當てゝ置きます、泥も落して置きます。

富藏　こんな男は便りないオイお前さん頼むぜ。

（ト龜吉に渡す。）

龜吉　ヘイ〳〵畏りました。

富藏　此脚絆は。

徳松　それは私がチヤンと洗うて置きます。

富藏　此男大丈夫かいな。

五兵衞　ヘイ〳〵大丈夫で御ざります。

富藏　お前徳ぢやな、徳に脚絆、龜にわらぢ覺えて置いてくれ、扨てあすは早い故此笠はオヽお前さんに頼んで置きます。

吉三　ヘイ畏りました。
富藏　そして此荷物は五兵衞に預ける。これも一所に頼みます。
（ト石工道具を渡す。）
五兵衞　ヘイ〳〵イヨ此包は。
富藏　大切にして置いてくれ、私の身代ぢや。
五兵衞　ヘえ御身代とは重う御座いますな。
富藏　重い筈ぢや中は金ぢやもの。
五兵衞　ヘエッ金ヘエ――。
（ト三人手を出して持つ。）
富藏　コレ〳〵何をしてゐるのぢや、障るない五兵衞慥に預けたぞ。
五兵衞　ヘエ番頭五兵衞慥に預り申します。
（ト帳場の引出しに入れる。）

富藏　厚かましいが、腹がへつたで米の飯喰はして貰へぬか。
五兵衞　へイ直にお支度申しますが御料理の御注文は。
富藏　何んでもよい久々に米の飯が食ひたい。
五兵衞　御冗談許りそして御料理は。
富藏　此邊は海邊で肴があるな。
五兵衞　へイ肴丈けは新しいのがウンザンに御ざいます。
富藏　ア、肴が食ひたいな。
五兵衞　へイどんな物がお好みで御ざいます。
富藏　鯛が食ひたい、鯛がなければ鰯でもよい。
五兵衞　へイ畏りました。
富藏　厚かましいが、酒が手廻れば酒も少し。
五兵衞　へイ承知致しました。
富藏　酒はぜい澤ぢやでどうでもよいが、飯だけは米から焚いてくれよ。
五兵衞　御冗談許りこれ德松お前は料理やへ大急ぎ、龜は酒やへ、これ吉三お前直ぐお湯の支度をなア。
吉三　へイ畏りました。

（ト奥へ入る富藏は、鼻紙を捨てる、五兵衛氣づかず拾ひ。）

五兵衛　旦那これは何で御ざいます。

富藏　アヽ失禮したハナぢや。

（ト五兵衛は祝儀と間違へ。）

五兵衛　ヘエお花有難う、御ざりますどう致しませう。

富藏　そこらにほつておけばよいぢやないか。

五兵衛　アノこちら共へ、コレ兩人お禮申し上げぬか。

二人　これは〳〵有難う御座います。

（ト三人表へ出て。）

徳松　何んとあの身なりで人は見かけによらんな。

亀吉　サア初めからさうと知つたらあんな事を云ふのやなかつたのに、これは山分ぢやぞ。

（ト中を開けて鼻汁を見て其處へ捨て花道へ入る、後を五兵衛見乍ら、それを拾ひ上げ。）

五兵衛　何んと云ふ失禮な事をする奴ぢや例へ中は僅にしろ、捨てる奴があるかい（中を見て）何ぢやほんまのはなぢや、ハーン上方の旦那はなさる事が違ふ粋ぢや、花をやろとほんまのはなをくれておいて後で小判とかへてやろ。イヤ有難う御座います。（ト懐中する）

富藏　五兵衛よ。

五兵衛　へエ。

富藏　まだ彌兵衛は歸らぬか。

五兵衛　モウ程なく御歸りで御ざります。

富藏　仲々大きな店がまへ倉もあるな。

五兵衛　イヤモウ納屋同様で御座います。

富藏　イヤ見事な物ぢや、此家屋敷は抵當に這入つてゐるとの事ぢやな。

五兵衛　ヘイ旦那様エライ事御存じで御ざいますな。

富藏　先き彌兵衛がさう云うた。

五兵衛　ア左様で御座いますかイヤモウ當家も此桑名で可成り人に知られた店で御ざいますが、

二三年此方の手違ひでトン〳〵拍手に手が合はず、主人も一生懸命元の仙臺屋にしたいと、あせつて居ります、此家も人手に渡すか渡さぬの境目で御ざいます。

富藏　ア氣の毒になア、お前は此家に何歳頃から奉公してゐるのぢや。

五兵衞　私は十二の年から御奉公に上つて居ります。

富藏　そんな時から此年まで奉公してかんじんの主人の家が左り前になつては主人よりはお前の方がたまらんな、私も人事に思へぬわい御主人様の心得違ひが元になつてイヤモウ此話をすれば又泣かねばならぬマアくよ〳〵するなよ、人間は何時迄も惡い事許りぢやない七轉び。

五兵衞　八起きでなア。

富藏　そいつぢやオ、五兵衞莨一服くれい。

五兵衞　ヘイ〳〵どうぞ。

（ト此時船頭十兵衞揚幕から走り出て。）

十兵衞　ついた〳〵〳〵船がついた〳〵〳〵。

（ト下手へ入る。）

富藏　ヒヤツ火事か。
五兵衞　イエ火事でも何んでも御ざりませぬ。
富藏　でも今大きな聲で男がついた〳〵と云うて走つてゐたぞ。
五兵衞　ヘイ今のは此桑名の港へ千石舟が入りますと町中ふれて歩きますので處の風で御座ります。
富藏　何ぢや船がついたのかい。俺はまた火事かと思うた處かはれば品かはるで吃驚さしよつた。

（此時花道より神崎屋手代兵助出て直ぐに内に入り。）

兵助　今日は。
五兵衞　オこれは〳〵まあお上りサアおしき。
兵助　ヘイ有難う。
五兵衞　一寸失禮致します。
富藏　オ火がないで炭をついで置きませう。

（ト富藏火鉢に炭をつぐ。）

兵助　此間はよく降りましたな。
五兵衛　サア〳〵此調子なら御天氣も續き相で結構で御座りますな。
兵助　此間の若狭やさんのは丁度山崎やさんと手が合うて片付きましたので偉い御心配かけましてすみません。
五兵衛　それは結構で御座ります、モウ此頃は大きな口は手が出せませんので御恥しい事で御座います。
兵助　何を仰有いますやら。

（ト莨の火を付けに行く。）

富藏　エイ此の人は何をするのぢや。
兵助　吃驚した何んぢやい此男は。
五兵衛　コレ神崎さんや失禮な事を云うて下さらぬ様になア。何ぞ粗忽致しましたか。
富藏　俺が折角炭を積んだのを默つて煙管でメチヤ〳〵にして氣が惡いがな。
兵助　これ物を大層に云ひなさんな莨の火を一寸つけたのがどうしたのや。
五兵衛　これ神崎やさん〳〵氣をつけてものを云うて下されや、あの方は何處の方と思うて居なさるのぢや。

兵助　あんな田舎者ぢやありませんか。
五兵衞　失禮な事云ひなさんな家の大事のお客様ですがな。
兵助　エツお客様で御ざりますか。
五兵衞　お客様も〳〵大事の御客様ですがな、江戸へお出でになる途中宅の主人がお頼み申して立寄つて頂いた家の福の神さまで御座りますがな。
兵助　それは〳〵存じませぬ事とてとんだ失禮を致しました、どうぞ御引合せ方々どうぞ御詫びをさしてお呉れなされませ。
五兵衞　チトたしなみなされませ、とんだ失禮を致しました。
兵助　何共申譯も御ざりませぬ存ぜぬ事とて失禮を致しまして相すみませぬ。
富藏　イヤ別にあやまる事ぢやないが、人間と云ふものは僅の事で氣持が惡いでな。
兵助　御尤様で私は矢張り此桑名で御當家同様の稼業、神崎や太兵衞の若い者兵助と申ます、どうぞお見知りおかれましてチト手前の方の店にもお立ちよりを願ひます。
富藏　そんな處へ行くかい。
兵助　ヘイ〳〵恐入ります、五兵衞さんどうぞよろしうお取りなしをお願ひ申しますとんだ失禮を致しましてお立腹の様子で御座りますな。
五兵衞　イヤ無理も御ざりませぬ私も先程エライ失策をやりましてな、と云ふのが身なりがなア。
富藏　そんな事を云ふものぢやない、身なりがきたないとてお前達にぬの子一枚買うてくれとは

云はぬ。

五兵衞　御尤様で。

兵助　時に只今ふれさしましたが御聞きで御座いませうが、此間から知らせのあつた舟が二杯はいりました一杯は手前の方で引受けますが一杯は此方様で水揚をして頂き度うて伺ひましたが如何で御座りませう。

五兵衞　どう致しまして只今の仙臺屋一杯の事はさておいて半分の水上げも出來ませぬ、此度はどうぞ他の御店で仕切つて頂きます様にお願ひ申します。

兵助　何を仰有いますやら仙臺やさんがそんな事を仰有たら桑名の町が暗やみで御座りますがな、旦那に一寸御相談して見て下さりませ。

五兵衞　相憎留守で御座いまして又よしやお店においでゝも、とても〳〵どうぞ今度は他の方へ御願ひ申ます。

兵助　困りましたな、お店を當に參りましたのに何とかなりませんか折角這入つて來た物を水上げも出來なんだとは外の港へ聞えても桑名の衰微、モシ五兵衞さん彼方に一寸御願ひ申しては如何で御座います。

五兵衞　サア氣の付かぬ事も御座いませんが主の留守に私一存ではなア、出過ぎたものぢやと叱られるかと存じましてな。

兵助　何が叱られますかいな、店の束（タバネ）の御番頭御留守の内に取引が出來たと云ふのは自慢にこ

そなれ、叱られる筈が御座りませぬがな一寸御伺ひして見なされ。
五兵衛　それもさうぢやな、それでは一寸ヘイ旦那に申し上げます、主の留守に出すぎた御話で御座りますが只今買うて頂くと云ふ様な御話には出來ませぬかいな。
富藏　買へとは何ぢや。
五兵衛　恐入りますな買へとはなんぢやなぞと、煙に巻かれてボーツと致しますがな。
富藏　お前は何屋ぢや。
兵助　何屋ぢやとは正面から一本参りますな、米屋と云ふのも恥しいほんの糊米や程の商人で御座います。
富藏　米屋か。
二人　米屋かとは恐入ります。
富藏　買へとは俺に米を買へと云ふのか。
五兵衛　どうです神崎屋さん米を買へかと太つ腹な方で御座いますな。
兵助　田舎の商人は度ぎもを拔かれますな、どうぞ御願ひ申します。
富藏　五兵衛よ俺の顔見てから直ぐ米を買へとはお前の店も餘程苦しいな。
五兵衛　御恥しい事で御座ります。
富藏　エツ仕方がないわ、買はねばならぬのなら買うて置く、早う持つて來いよ。
五兵衛　ヘエ恐れ入ります一口商ひ大きい物で御座りますなそれではせめて一杯丈け。

富藏　タツタ一杯か。
五兵衞　タツタ。
富藏　俺丈けぢやで一杯でもよいが僅の商ひで氣の毒ぢやな、俺處の堺の親方なぞは一日に五六杯は毎日あけたぜ。
五兵衞　ヘイ一日五六杯。神崎やさん聞きなはつたか。
兵助　モウ御話丈けで氣が遠くなりますな。
富藏　此邊の人は何を食うてますのぢやいなア芋かいな、まあ俺一人ぢや一杯でよい早い事しておくれ。
五兵衞　ヘエ神崎屋さん相場は立つてゐますかいな。
兵助　ヘイコレ〳〵が水上げになつてゐますので。

（ト算盤を見せる。）

五兵衞　成程――ヘエ旦那様只今一杯の相場はこれ〳〵で御座います。

（ト指二本ヅツ見せる。）

富藏　なんぼでも仕方ない時の相場なら買うて置くわい。
五兵衞　へーどうです神崎屋さん聞きなさつたか、時の相場なら買うて置くと小首一トつかたげなさらずエライものですな。
兵助　イヤモウ胸がすいと血が頭に上りますな、それではお手を拜借しませうか。
五兵衞　イサイ承知ヘイ旦那お手一トつ。
富藏　一杯位の米買うて手を打つのかい、尻の穴の小さい處ぢやな、堺あたりでそんな事云うたら笑はれるぞ買うたら買うたに違ひない早う持て來い〳〵。
五兵衞　ヘイお言葉で御座りますが處の風で御座りますのでどうぞ一トつ御手拜借を。
富藏　しゞみ貝程の氣の小さい處ぢやな。
二人　ヘイヨー〳〵〳〵。

（ト三人手を打つ。）

兵助　有難う御座いますそれでは直ぐに水揚げを。
五兵衞　神崎屋さん一寸、旦那誠に申かねますが何程でもよろしう御座いますが少しでもお手附を。
富藏　金かよしツ手附などで僅の商ひに面倒臭い皆拂ふぞ。

兵助　モシ旦那一寸お待ちを……。五兵衛さん一寸表まで。

（ト五兵衛と共に表へ出て。）

兵助　五兵衛さんしつかりしとくなはれ、あのお客の云ひ草を聞きなはつたか桑名と云ふ處は芋喰うて暮してゐるのか尻の穴の小さい處ぢやとエライ云ひ草やおまへんか、よしやそれに違ひなうても餘りよい氣持ちがしまへん、其處へ一寸お手附けなんて云ひなはんな又云はれますがな、しかも江戸へ行く大商人桑名の町で米買うたら直ぐに手附けと手を出した、田舎商人は度胸がないと江戸の町で云はれたら、手前の店やお店の恥ですみません桑名の町にキズがつきますからな。

五兵衛　サア私も思はぬでは御座りませんが、何を云うても主人は留守なり。

兵助　よろしい例へ手前の店の主が何と申しますとも、桑名男の度胸の見せ處一番私が引受けて手附けは御立替へ致して置きます。

五兵衛　それでは貴方の方のお店で御立替へ下さいますか。

兵助　大丈夫引受けますから五兵衛さんお客様の事は大丈夫で御座いませうな。

五兵衛　此の方なれば安心しておくなはれあきれましたな、あのお姿で道中して然も大金を手拭に包んで平氣で下げて歩いて御座るのには吃驚しましたな。

兵助　ヘエそれでは大丈夫直ぐに水揚げにかゝります。
五兵衛　頼みますせ。
兵助　萬事承知、旦那様有難う御座います、オーイ水揚げぢやぞ〳〵。

（ト足早に揚幕へ入る。）

五兵衛　旦那様有難う御座います。
富藏　五兵衛伊勢は泉州より米が高いな。
五兵衛　ヘイ左様で座御いますかいな。
富藏　堺では大抵一杯十六文か七文止りぢやが此方は二十二文ぢやとな。
五兵衛　十六文ヘイ〳〵白米の小賣値段で御座ります、それなら當地もその様な値段で御座います。
富藏　伊勢の奴は人が悪いな旅の者と思うて二十二文に賣つたな。
五兵衛　イエどう致しまして。
富藏　イヤ今の米の話ぢや今一杯買ふたであらうがな、一升枡に一杯二十二文は高いと云ふのぢや。
五兵衛　旦那御冗談許りそんな冗談被仰つて旅をしておゐでなされますと面白い事で御座りま

せうなア。

富藏　イヤ冗談ぢやない今の米の話ぢや一升枡に一杯買うたであらうがな。

五兵衞　何を被仰いますやら今のは千石船に米が一杯で御座りますがな。

富藏　千石船に米が一杯俺は繪に描いたのを見た事があるが、本ま物はまだ知らぬ見事な物であらうな。

五兵衞　なぞと眞顔で冗談許り、田舍の番頭をなぶつてやろとお人の惡いへゝゝゝ。

富藏　何のなぶるのでもない一杯二十二文の米は高いと云ふのぢや。

五兵衞　イエ今のは千石船に米が一杯二千二百兩と申しますので御座ります。

富藏　千石船に米が一杯二千二百兩おそろしい話ぢやなア。

五兵衞　なぞと眞顔でお人の惡い商ひ中場にそんな洒落被仰います、田舍者の私等はチヨイ〳〵ほんまに致します、モウよい加減になぶらずお助け下さいませ。

富藏　五兵衞お前なんぞ間違うてへんか、俺は二十二文で米が一升買うたのぢやで。

五兵衞　何ぼおなぶりなされても、旦那の身代は私がチヤンとお預りして居り升でな。

富藏　何私の身代とは

五兵衞　先き程の手拭包みチヤンとお預り申して居ります。

富藏　あの中は玄能と石火矢ぢや。

五兵衞　石火矢と玄能ぢや。

富藏　お前なんぞ感違ひしてやせんか、俺は石やの職人であれは石火矢と玄能、私の商賣道具ぢや。

五兵衞　ヒヤツ中は小判と違ふのか。

富藏　そんな金がある位ならなんで苦勞して江戸まで行く、開けて見い中は金の槌ぢやわい。

五兵衞　へー。

（ト以前の手拭包を持ち來り中を開けるとヒヤと玄能出る。）

富藏　五兵衞お前なんぞ間違へてやな。

五兵衞　エ、納まるない、お客〳〵と吐す故田舍者の大金持と思うてかゝつた此方があやまり、何故こんな物を身代ぢやと吐したのぢや。

（ト富藏を押へ付ける。）

富藏　堪忍してくれ〳〵。ヒヤと玄能は石やの身代、それ故身代と云うたのぢや。

五兵衞　サアその身代は兎も角なんで金ぢやと云うたのぢや。

富藏　石屋の使ふ玄能に土や木では間にあはぬ、それゆゑ金と云うたのぢや。

五兵衛　エイこんな金がどうなるかい。
富藏　見てくれ金ぢやわい〳〵。
五兵衛　金は金に違ひはないわい此金故に此騒動、お前は何も知るまいが我々仲間で取引して賣つた買うたと手を〆めて、金がないと云うた日には天下法度の空相場盗みかたりよりも重い罪、代々つゞいた仙臺屋も欠所になつたその上で旦那は白州でしばり首、主の首に繩打てるか、俺は此まゝ名乘つて出る今にも旦那が歸つたら此譯云うて置いてくれ。
富藏　五兵衛待つてくれ〳〵、世間を知らぬ悲しさにこんな騒動にならうとは俺は夢にも知らなんだ、俺がお世話になつた許りにお前の首に繩かけて、どうして俺が見て居らりよ、奉公する身は皆一とつ、俺も主人で憂き苦勞、忠義といふ字にニツはない、行かねば叶はぬ御白州なら、俺がこれから名乘って出る俺をやつてくれ〳〵。
五兵衛　お前をやつては話がつかぬ放せ〳〵。
富藏　まつてくれ〳〵。
五兵衛　エヽ、放せ〳〵と云ふのだ。

（ト手荒く振り切り花道へ走り入る、富藏はその後を追ひ行き七三にて。）

富藏　オイ五兵衛まつてくれ〳〵オーイ。

（ト氣落ちして倒れる此時花道より以前の兵助出來り富藏を抱き起し乍ら。）

兵助　オヽ旦那様何をしておゐでなされます、又五兵衞がお氣に召さぬ事でも申し上げましたのかサア〳〵御機嫌直して。

（ト内へ連れ入り持ち來た角樽を前に出し。）

兵助　あれから歸りまして今水揚げの最中に阿波から大盡が參りまして四丁上げで買ひたいとの事、相場は立てゝ參りましたが只今お賣りなされますと貴方のお儲が四百兩、手前共の店口錢が四十兩元々强氣の旦那様お賣りなさる様な氣づかひ御座りますまいが、一應伺つて見よとの云ひ付けで參りました如何な事で御ざりませう。

富藏　ナニ、モ一遍云うてくれ。

兵助　ヘイ只今お賣りなさいますと貴方のお儲が四百兩手前共の口錢が四十兩頂けますので。

富藏　ウムそれでは俺が賣ると云うたら。

兵助　ヘイ四百兩のお儲け。

富藏　オ神崎屋賣つてくれ〳〵〳〵。

兵助　ヘイ。

（ト再び兩人手を打つ。）

兵助　賣つた〳〵。

（ト兵助元の處へ入る。同時に花道より仙臺屋彌兵衛、同じく五兵衛走り來り、富藏に打つてかゝるをよけて。）

富藏　彌兵衛か、千石船に米一杯買うた。

仙臺屋　サアそれ故に此騒動ぢや。

富藏　相場が立つた。

仙臺屋　ヒエーツ。

富藏　上つた。

仙臺屋　ヒエーツ。

富藏　賣つた、四百兩儲けたツ。

二人　ヒエーツ。

（ト二人ヘタバル、同時に揚まくより、神崎屋太兵衞先頭に兵助は四百兩の金を三寶にのせ若もの大勢連れて出來り。）

太兵衞　仙臺屋様御免下されませ、早速乍ら商人冥利、承りました上方の旦那様に御目にかゝり度く、御引立てになりました御方御引合せをお願ひ申します。

仙臺屋　ヘエ旦那は此方で御座います。

太兵衞　オこれは〳〵初めて御目にかゝります、神崎屋太兵衞と申します、今日は御引立に預りまして私は桑名の町人神崎屋太兵衞と申します、これを御縁に幾久しく御引立の程偏にお願ひ申します。これは仙臺屋様から旦那様へ。

（ト三寶を出す仙臺屋は富藏の前に持つて行き。）

仙臺屋　ヘイ旦那お納め下さいませ。

富藏　オヽこれ皆、俺の金か此金どうしよう〳〵、有難い〳〵此百兩は國へ歸つて御主人様を助けるお金。

（ト百兩を懐中へ入れる。）

富藏　此二百兩は仙臺屋彌兵衛への志これを元手に精出してゆがんだ家を持ち直せよ。此五十兩は番頭五兵衛へのテンカン料。

五兵衛　有難う御座います。

富藏　殘る黄金の五十兩は神崎屋御一統への志。

太兵衛　それでは餘り。

富藏　ナニやせてもかれても堺の富藏、此處が男の。

（ト胸を叩く。）

（木の頭）

富藏　度胸ぢやわい。

（ト芽出度々々々の唄にて小判を撒く、皆々有難う御座いますと禮を云ふ。宜敷。）

――幕――

底本　日本戯曲全集　第39巻　現代篇第7輯
出版者　春陽堂
出版年月日　昭和4